

ここに帰ろ

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

「ここに帰る」

第八十八号

令和八年一月一日発行

目次

『あしかび』二十号

欲望の性質

和田先生と私

柳廣烈

和田重正

柳廣烈

和田重正

まみす 昭和四十九年六・七月合併号
人間のため
白い杖

まみす 幸享・柏樹社十周年記念大講演集
「わがいのちを生きる」 バネルメンバー

ヤルンカンジ登場の聲として
本物とは何か

西堀栄三郎

藤本博

和田重正

和田重正

西浦まみす会通信
視野を広げる

後記

48 42 37 31 14

12 8 2

表紙写真

田切越しに望む木曽山脈

長野県上伊那郡

撮影 平澤正義



発行人 はじめ 塾 和田重正
印刷人 大畑 喜美子
昭和三十五年十一月四日

日曜の話 十月三十日

欲望の性質

前回に述べたように、人間には他の生物にないいろいろな欲望があります。非常に変化に富んだそれらの欲望が互いに助け合い、または抑え合ったりして、千変万化のすがたをあらわします。

仲の良い人たちが集まって楽しい音楽を聞きながら食事をすると、食べ物もおいしく、音楽もいつそ快く、交わりも一段と深くなつて、それらの欲望は互いに助長し合つていることになります。ところがテレビの西部劇も見たい、勉強もしなければならない、寝るのも必要だ。これらは互いに抑え合つて

また同じ人でも、時と場合によつて欲望の配合の割合は変わります。

しかし、だいたい人は、おのおのその人独特の配合をもつてゐるもので。それがその人の人柄として感じられるわけです。今まで欲張りで不親切で生意気で、みんなから嫌われていた人が、何かのきっかけで急に親切なつましい人になつたとか、若いときには眞面目でコツコツと仕事に励んでいた人が、中年になつて急に酒を飲み、道楽をして、仕事をろくにせず、人を縛してお金を儲けるようになつたといふようなのは、欲望の配合が急に変わつたのです。

さて、そうしてみると、欲望の配合・調節がきわ

いる関係です。

もちろん人によって、おのおの欲望の配合の割合が違います。ある人は、人から好かれたい欲が強くて物質欲が弱いかと思うと、その反対の人もある。あるいは、前に述べた他の動物と共通な本能的欲望ばかり強くて、人間独特の欲望はまるで弱いかと思うと、その正反対の人もある。

めて大事な問題だということがわかります。

では、どんな配合が理想的なのでしょう。これに
対して「これこの通り」とハッキリ示すことは、私
にはできません。ただ私は、経験から知ったことを
お話し、みなさんが考えるのに役立つ資料を提供
することができるだけです。

前に言つたように、すべての欲望は、生命の目的
のために生命の手足として発生し、成長したもので
す。だとすると、欲望は生命の目的に役立つように
働くかなければならぬ。それが欲望の正しいありか
ただと言わなければなりません。では生命とはどん
なもので、どんな目的をもつていてるかを知らない
ば、徹底しないのですが、一二では一応、形がなく、
したがつて切れ目（境目）がなく、その本体は「こ
れ」といつつつかまえることはできない、そのくせ
ハタラキはある。そしてそのハタラキは発展・向上
の方向に働く性質を持つていて、破滅向下の方向に
は働くことしない。つまり生命の目的は自己の発展

にあると言えます。これは大事なことで、このこと
が認められなければ私の話は全部成り立ちません。
自己の発展というのは、他の人や物と自分との結
びつきを作り、その相手から何かしら取り入れて自
分の内容をふやすことです。社交、旅行、読書、研
究、実験などはみなその目的に適した業です。これ
を横への発展と言えば、自分の精神を打ち込んだ芸
術作品を遺したり、思想を人の心の中に遺したりす
るのは、子孫を遺すのとは別に、自分自身を時間的
に発展させることで、これを縦への発展と言つこと
ができるでしょう。

このように生命は縦横に自分自身を発展させようと
不斷の働きをしているのですが、その働きが欲望
となつて現われているわけです。そして人間の生命
は、他の生物とは比べものにならない、ねばり強い、
複雑な生命力を持っていて、縦にも横にも他の生物
とはケタ違ひの素晴らしい発展を遂げています。
——この発展はみな欲望の功績です。この面から見る
と、人間の欲望は、生命の目的に適つた働きを果た

してきたと言えます。

ところが他の面から見ると、ここに個人個人についてよく觀察すると、ずいぶん適当でない欲の活動が目につきます。適当でないというのは、生命の発展に奉仕するのではなく、反対に生命の発展を妨げ、あるいは生命を破滅に追い込むような働きのことを言うのです。食欲ばかり重んじて、胃腸病やその他いろんな病気になつて、えらくなりたい欲や人と楽しく交わりたい欲、あるいは、もつと生きたい欲までも犠牲にしてしまつようなのはその例です。お金持ちになつて優越感を楽しみたい人が、むやみに金儲けに熱中してしまつと、せっかく目的通り十億円儲けても、あらゆる人から恨まれ、軽蔑され、自分の妻子に対する警戒心を抱かなければならぬ目に陥り、その人の生命全体の発展という点からみたら、何のために金を儲けたのかわけのわからぬ結果になつてしまします。つまり、生命の発展のための金銭欲が他の重要な欲望の発展を妨げて、結

局、生命全体としてみると大きなマイナスを稼ぎ出したことになります。

こんなバカバカしいことに、なぜなるのでしょうか。ここで欲望というものの特性を一つ明らかにしておかなければなりません。それは欲望は、本来生命が自己発展のために発した、いわばその手足のような役目をするのですが、不思議なことに、欲望は、一旦欲望として発せられると、その欲望を達するためには専心し、意識をも支配してしまつて出発点を顧みることができなくしてしまつという事実です。だから欲望を発し、それを赴くままにしておいたら、自分の主君である生命をも侵すようなども平氣でやります。それで人間は困るのです。

その典型的なものが原水爆です。武力というものは、昔は、けものや他の部族の攻撃から自分を守るために必要だった。だんだん後になると、自分の国が他の国から征服されないために必要になつた。いずれにしても、武力というものは、自分の身を守り、ある場合は他を征服して自己を発展させるために必

要だつた。そういう目的を持つたものが、ついに自分自身をも滅ぼしてしまつものを作り出してしまつたのですから、一体何のための武力なのかわからなくなつてしまつました。生存欲がどこまでも、どこまでも野放しになつて行くと、自己の生存を危くする仕事をしてしまつのです。

つまり欲望のものは盲目で信用できません。進んで退くことを知りません。操縦装置のないロケットみたいたいものです。

そこで、われわれは、自分のいろいろな欲望を、その本来の目的である、生命の発展のためにうまく役立たせるのにはどうしたらよいか、というところまで来ました。ロケットに操縦装置をつければよいと簡単に言つても、それでは問題の解決にはなりません。

一、ロケット（各欲望）に操縦装置をつけられるもののかどうか。

二、つけたところで、多くの欲望の間の勢力をどう調整したら總体としてよいのがわかるなければ、

どうにも仕様がありません。

八万四千という、生命軍の部下が活躍していると考えましょう。これらの部下がめいめい勝手に活動していたのでは同志討ちをしたり、一兵卒が味方の幹部級の將軍に闇討ちを食わせたりして、まことに能率のわるい戦いをしてしまいます。そんなまざいことをせず全戦線を統一して、欲望軍の総力を發揮して主君生命の発展に奉仕させるためには、聰明な大将がいなければなりません。

そんな立派な大将がどこかにいるのだろうかと、疑うかも知れないが、いるのです。私の中にも、みなさんの中にもいるのです。このことは、昔からあらゆるすぐれた人々がみんな口を揃えて断言し、保証してくれています。

この大将というのが、われわれのいのちの中に常にそなわつてゐる睿智です。これがいつも采配さいばいをふるつて欲望軍の指揮をしているのですが、われわれの意識に上つてくるのは、欲望軍の前線で、そこは

いつもガヤガヤ、バタバタと実に騒々しくて、大将の命令が聞こえないのです。そのために欲望軍の大各部隊は勝手なところで勝手な働きをして、本来の使命に反するよつた事をしてしまうことにもなるのです。

こういう欲望のすがたを見て、われわれはあわてて欲望を生命に對する悪魔的な敵軍かと誤認したり、あるいは阿修羅の如くに荒れ狂うのを外からの圧力によつて取り鎮めよつとして、大へん骨を折ります。

しかし欲望は、本来、生命の手足で、生命の命令には絶対従順ですが、それ以外のものの干渉に對してはなかなか屈服しようとしません。

ですから、欲望を有効に働かせるのには、われわれの意識という欲望軍の最前線にある伝令機関がいつも総大將の命令を正しく受け取ることができるようにしなければなりません。

それにはどうしたらよいのでしょうか。欲望戦線の騒ぎを一時鎮めさえすれば聞こえます。ではどうし

たら鎮まるか。——もへ、みなさんはわかつたでしょう。そうです。どうもこうもありません……。(この先は口で言つより仕方がないのです。聞きたい人は私に直接聞いて下さい)。こうして欲望のざわめきを鎮めて総大將の命令を聞くことになれてくると、だんだんに、ざわめきの中ででも聞きとれるようになります。

どうか、この本当の話を聞いて、「ようし、きたッ」と勇気を出して下さい。

なお、参考までに、付け加えておきます。

いのちとの密着度から考へると、いのちを底辺としてその上に第一段の欲望として、食欲・睡眠欲・性欲・運動欲の四つの欲望があります。これらの欲望はだいたい高等動物はみんな持っています。

更に第二段として、第一段の四つの欲望以外の感覚的欲望があります。これはある種の高等動物は多少持つているらしい。

つぎに三段以上に、金錢欲・物欲、名譽權勢欲・

支配欲、安心立命欲、愛他隣人欲、と六段までの欲望が考えられます。三段以上になると、人間だけしか持つていらない欲望です。

更に七段には無欲欲、そして頂上に何という欲とも名づけられない欲というものが考えられるでしょう。しかし、そういう生命から見れば間接的な欲望も、出発点は生命自体にあるし、また本能的欲望の上に芽をふいたものであることを忘れてはならない。

もし欲望に高級低級をつけるならば、生命に近いほど低級で、それから離れているほど高級だと言えるかも知れない。しかし低級だから価値が少ないとか、粗末にしてもよいとかいうのではありません。むしろ、大切といえば基礎ですから、一番大切かも知れません。大事にして乱暴な働かせ方をしないようにならなければならぬでしょう。

でも、それと同時に低級な欲ばかり大事にして発達させて高級な方をおろそかにしたのでは、それだけ、けだものに近いのであって、人間らしくないことになります。

(おことわり) この話をはじめてしてみました
が、やはりまだみなさんわかるほどやさしく話すことができないことがわかりました。それは私にまだ力がないことをあらわしています。二回や

人間である以上、より多く人間らしい方がいいのですし、やはりそれが人間としての生命の要求なのです。それから、もう一つ知つておかなければならぬことは、生命に近い欲の方は、特に意識が取り上げてかまつてやらなくて、生命の維持に差支え上るほど衰えることはありません。むしろ余計なおせつかいをしない方が健全に働くのです。それに反して、高級な欲つまり生命からの距離の遠い欲は、自然に放つておいたのではなかなか発達しません。意識によって開拓して育てていかなければなりません。
こういう事実を知っていると、ある欲と他の欲と衝突してどっちにしようかというとき、なるべく人間らしい欲を取る方が、動物に近い欲に従うよりも、より人間らしい選択の仕方だということがわかります。

つてみて、どうしても駄目だとわかりましたので、これで打ち切ります。また、五年か十年もたって、もつと私ができたら、その時にはもつとわかるようにならぬか。しかし、そのときには、みなさんはもう、この話ぐらいはわかる年齢になつてゐるでしょうが。

でも、この話が、わかつてもわからなくとも、何か感じた人があつたら遠慮なく、どんなギロンでも吹ッかけて下さい。もしそんな人が一人でもあつたら、私はどんなにうれしいか知れません。

和田先生と私

柳 鷹烈

次の文は「あしかび」に載せるために送つて來たものです。読んでみると、私は冷汗をびしょりかいてしまいましたが、それはそれとして、柳君の私に対する敬愛の気持がありのままにあらわれていますし、それがまた私の柳君に対する気持そのものであることを深く感じますので、きまりのわるやこうをこらえて原文をありのまま載せます。

私が中学校五年生の時だったと思いますが、その時分、私はこんなことを考えていました。

「ほんとうに立派な人に会つてみたい。過去の人物では孔子様、お釈迦様のようなえらい方が居られたのですが、そんなお方で現在生存している人物に会いたい。言行録など読んでみても歯がゆいところが多い。もつと具体的なことがききたい。どんなに悩まれたか、そしてどんなに解決なされたかを。そ

柳鷹烈さんからの手紙

柳鷹烈君は朝鮮（韓国）京城の京畿中学校で理科の先生をしています。先頃副校長になつたそうですが、家では三男二女のよきお父さんです。

してそんな方はものすごく明るい智恵と完成された人格をもつていられるお方であるに違いない。そんなお方に会つて、その指図に従つて自分も修行したいものだ」

こんな願望を抱いていた時にみつけたお方が和田先生でした。

その時和田先生は修身と公民科目を担当していらっしゃました。先生の講義は本を読ませて説明するよ

う窮屈な講義ではありませんでした。すべて先生自身のお話でした。大抵の先生は誰々様がこんなことを言つた。何々の本に「こんなことが書いてある」といふようなお話でしたが、先生は御自分で体験なさつたこと以外にお話なされたことはありません。先生のお話には自信があり、非常なおもみを持つていられた。私はひそかに「こんなことを考へました。
「確かに和田先生は眞実を把握なさつたお方だ。
その奥の拠つて立つところを究めよう」と。

ある時「こんな話をなされた。誰でも自分で造つた因は消すことは出来ない。必ず果を受けるものだと。

私は先生に質問しました。それでは悔い改めるといふことは意義のないことではありませんか」と。

先生のお答えは「ううでした。「懲悔すれば因果律の埒外に立つのだ」と。その時は無論その意義は分からなかつたのですが、先生のお言葉を信じました。自分もそれが分かるまで頑張つてみようと決心しました。今になつてその意義がどうやら分かつたのが。

その時分、私は西荻窪の先生のお宅を時々お尋ねしました。先生のお話を熱心に聴きました。夜の二時まで聴いたことが何度もあります。夜の道を希望に燃えて、或いは思いに沈んで徒步で下宿に帰りました。その後私はすべてを先生から戴きました。先生を通して絶対者を拝むことを知りました。或る時先生は「こんなことも話された。「目に見える人間同志が信せられないなら、目に見えない神さまを信ずることなど出来るものではない」と。

私は和田先生を絶対的に信じていましたから絶対者を信することができます。教育の力はこんなに

偉大なものです。

私は、先生の前では何物も隠すことが出来ませんでした。すべてを熟知していられたからです。自分でもそれを努力しました。そして誠心誠意を尽くさうとしました。

東京の西荻窪にお宅があつた時です。八幡神社の^{はふ}ある谷間に小川が流れています。その小川の辺りで先生と畑作りをしたのですが、はじめてくわを使うときは大分骨が折れました。腰は痛い、腕も痛い、ほんとうに堪えられない程です。そのうちにだんだん工夫しました。そして遂にくわを使う要領を会得しました。今までは腕の力で使っていたのを全身の重力をもつて使う要領が分かったのです。そうなると楽なものです。一日中くわで畑を耕したって何でもないんです。おしゃべりをしながら畑を耕すんですけど。

でも一人でやっていると疲れが来るんですね。そんな時にひょっこり先生がこられて世間話でもそばでなさると、重かっただくわが急に軽くなるんです。
その後、私は『発心總願』を読みました。それはこんなすじ道です。法藏菩薩が世自在王仏のみ前に現われて四十八の誓願を立てるのです。その誓願を憶えてはおりませんが、そのあらましは有情非情、ありとしあらゆるものを作仏させなければ自分は仏にならない、というとてつもない宏大な誓願です。ところが世自在王仏がその誓願を受け合ったのです。なんとすばらしいことでしょう。「君の願いはかなうぞ」といってやったのですよ。誰でもこうなると勇氣百倍するでしょう。皆さんのが自分の願つている学校に入学したいと願いを起こして木か鉄物で造つた仏様のみ前でその願いを立てて、その仏様がおもむろに「君の願いはかなうぞ」と言つたとしたらどう

の。精神力、誠心誠意は一んなに通ずるものですね。
「それは一緒にくわを使つていたんだから軽くなるはずだ」

でしょう。その願いを果たすために勇躍邁進するでしょう。それが木か鑄物で造った仏様でなくて、生きて動いている仏様がおっしゃるならもとと確実でしょう。そして法藏菩薩は無限劫を修行してありと

しあらゆるもののが成仏しているのをみて、自分も最後に仏になつたのです。その仏が阿弥陀様です。そしてアミダ様は迷つている衆生しゅじょうを救うために觀世音菩薩の位に下つたといつすじみちです。

私はこの総願を読んでこれは自分のことだな、と思ひました。なるほど先生は世自在王仏だ、そして自分は法藏菩薩だと。和田先生と私はこんな関係なんですね。

お釈迦様が「こんなことをおっしゃつたのです。
「人身は甚だ得難く仏の世また遇い難し。
見て恭い得て大いに喜へば
即ち吾が良き親友なり」と。

〈行事と案内〉

○

高野毅先生を囲む座談会

〔盤珪不生禪と森田生活道〕

十一月十三日　はじめ塾有法堂にて

・高校生、大学生諸君に、ぜひ聞いてもらいたい
・ノイローゼ気味の人は何をおいても聴聞せよ

○ ○

部屋の出入りのきまりは確実に実行しよう。
○ 個人の室に勝手に入つてはいけない。



人間のため

白い杖 41

人間のための宗教、人間のための教育、人間のための医学、人間のための技術、などという声が大きくなってきた。そしてようやく、「産業を人間に合わせて」という記事が新聞に出るようになった。宗教や教育までも人間を忘れてあらぬ方へ迷い込んで猛威を振るつたため人間が息苦しくなったのだ。一切の文明も文化もともと人間のためのものだったことに人々が気づきはじめたのだろう。結構なことだ。しかしその人間とは? 実は「これが問題なのだ。

『まみず』百号・柏樹社十周年記念大講演集

1 鼎談 「わがいのちを生きる」 パネルメンバ

西堀栄三郎
藤本 博

和田 重正

2 講演 「山岡鉄舟」

大森曹玄老師

大森老師の講演は、都合により次号
八十九号に掲載させていただきます。

まえがき 本稿は、五百人余
の参加者を得て誠に盛会であった

右記講演会のお話を、当編集部の
責任でまとめたものです。演者の
先生方を、紹介します。

第一部の最初にお話いただいた
西堀先生は、現在、日本規格協会
の顧問をなさつていらっしゃいま
すが、これまでのご経歴は、皆さ

んご承知のよつに、日本の大学山
岳部をはじめて作られた方ですし、

第一次マナスル登頂にも参加され、

最初の南極越冬隊の隊長をされた
方でもあります。常に日本ではじ
めての仕事に取り組んでこられた

方です。

次の藤本先生は、神奈川県青年
の家の生みの親、育ての親であり、

その情熱的なお人柄は、若い人々
の敬愛の的である方です。

和田同人は略しまして、

第一部の大森老師は、本当に「底
がぬけた」方というのはこういう
方をいうのでしょうか、禪・剣・
書の真義をきわめた方です。現在、

花園大学の教授であり、鉄舟ゆか
りの高歩院のご住職でもあります。



ヤルンカン

登頂隊の
隊長として

西堀栄三郎

(日本規格協会顧問)

ただいま御紹介にあずかりました西堀です。今日は、柏樹社の十周年、また「まみず」百号の出収記念の会にお招きいただき、大変光榮に存じますと同時に、柏樹社におかれましても一層、繁栄になりますことを願つてお祝い申しあげます。

早速でござりますが、どうも

の「わがいのちを生きる」という

表題で、しかも皆様方のようだ

私は京都の町中で生まれた人間

前向きに生きる

立派な方々の前で、私が何も申すことはございませんし、また申し上げましても、全部恥をさらすようなことにばかりなつてしまつおそれもございます。また私のような生き方は他の方々におすすめするような、そういうものではなくて、ずいぶんスジ違ひなものでございますので、お役に立つとも思えないのです。

むしろ私は、自分がこのような生き方をしてきたということを申し上げて、藤本先生や和田先生から批判をいただきたいと思つ次第でございます。

「何もお前、人間は体だけとちがうぞ」
と言つてくれまして、そんなようなことから少しずつ自分で何とか工夫して体が弱いことを補うつもりでやってまいりました。

そのうちに、私のうちちはちょっとした仏教信者なんですが、今まで、愛宕山の頂上、これは京都の西の方にある山でござります

が、そこへ参つて毎月お札をもら

うことになつておりました。私の所からも番頭さんが毎月お札をも

らいにいきます。

ある日——私が小学生の時です。
「私も連れて行ってくれ」

と言いましたところ、

「あんたみたいな じゃまになる

もん、かなわん、かなわん」

と言つて連れていくつてくれないんでござりますが、むりやりついて行きました。

やはりからだも弱つございまし

たし、愛宕山というふうな低い山でしたけれど、登るのにはずいぶ

ん苦勞いたしました。帰つてまいりますともうクタクタになつて、

もう二度と山には行かないだろうと皆が思つていたようでしたが、

私はまたしても、

「おいボンスケも連れていつてくれ」

と言い出す。しかし、何へん山へ行きましたも、いつこうにどうも

からだの方がうまくいうこときいてくれません。ちょっととも上達し

たようにも思いませんでした。

そのうち番頭さんが変わりまし

て、新しい番頭さんが行くことに

なりました。そうなりましたら、

とたんに話がかわってまいりました。私がむしろ愛宕山のことにつ

いてはよく知つてゐるわけござい

ますから、今度は私が先達になつ

て行くことになつたわけです。あ

まり、何かしら前向きに進歩する

ております。やっぱり人間という

ものは自分で今までやつて來たよ

り、何かしら前向きに進歩する

と調子に乗つて何でもできるよう

になる、そつなると自分といふもの

が、何かすべてよくなるもんだな

いぞといつたことまでよく知つて

ありますし、頂上へ行きましたも

札買つ時にはこうして買つのだ、

ああして買つのだ、ということを

申しますと、もう番頭さんも「そ

うですか、そうですか」と言つて

やつてくれるのですから、私は

もう得意満面でございました。

そして帰つてまいりましたら、

いつもと違つて全然疲れておりま

せん。もうシャンシャンしている

わけです。はてなこんなはずがな

いと自分でやうえ思つぐらゐ変わつ

ております。やつぱり人間といふ

ものは自分で今までやつて來たよ

り、何かしら前向きに進歩する

と調子に乗つて何でもできるよう

になる、そつなると自分といふもの

が、何かすべてよくなるもんだな

いぞといつたことまでよく知つて

あといふことが感じられました。

実は正直に申しますと、その調

子に乗った勢いで、近い山からあ
っちの山、こっちの山へと登った
りするところが始まったので、私の
山登りのきっかけはそういうこと
にあつたんだと思ひます。

その時以来、私は心のもち方と
いうものがいかに大切なものであ
るかということを感じましたし、
それからというものは、すべて物
事を能動的に考えよう、受身でな
く、能動的に考えようと思い始め
ました。

船を自分でゆすぶる

私は、からだも十分でなかつた
ものでしたから、船に乗りりますと、
すぐ酔つてしまひます。たまたま
京都から大島へやつてきても、も

うすぐ船に乗るとゲロゲロやつて

しておきました。

しまいます。他の友人はシャンシ
ヤンしているのに、私だけなんで
こんなに酔わなければならんのか、
と思うぐらいでございました。そ
のとき友人が、

「お前何や、船に負けとるのや」
と言いますのですから、それか
らというものは、船を自分でゆす
ぶつているんだと思うように心掛
けたんです。なかなかこれはそう
簡単ではございませんでしたけれ
ども、だんだんそういうことに慣
れてまいりましたら、今度はもう
途端に船に酔わなくなりました。

戦前アメリカに留学を命ぜられ
ました時、やはり船に乗つて行き
ましたが、皆さん全部ダウンして
おられましても、私だけはちゃん

としておりました。
の船はよくゆれるのでござります
が、もう船長以下全員ダウンした
ことがございました。私はあの大
きな宗谷を一生懸命にゆすぶつて
おるのでござりますから、もうハ
ラが減つてハラが減つてしまふ
ない。大きなナベの底に冷や飯が
ございましたので、そいつをドン
ブリバチに入れて、そしてウナギ
のカバヤキのカンヅメをあけて食
うたことがございました。その日、
メシを食つたのは私だけでござ
ました。晩になりますと、もうケ
チョンケチョンにからだが疲れで
おりますもんですから、もう横にな
つたらグースカ寝てしまつた。

四十五度揺れた時など、どうどう

上から落ちこちてしまつたこともございましたけど、それぐらいよく寝てるわけでござります。

まあ、万事そういうふうに能動的にやるのがいいのだということを、それから何につけ考へるといふようになりました。私も中学校の終わりになりますと、人生いろんなことを考へる時期がございましたが、その時に、一体人間、何のために生まれてきたんだろうかなどと思いまして、その時「人生、人間は経験を積むために生まれてきましたのだ」という、きわめて幼稚な人生観ではございませんけれども、この人生観が、実際正直に申しますと、今まで生き生きと続いております。

南極とヒマラヤ

ております。

私は昨年の二月から六月までヒマラヤに行つてまいりましたが、ヒマラヤの山の中でも、世界で一番目に高いヤルンカンという山に登つてまいりました。もちろん私が登つたわけではございませんが、その時に、ちゃんとプレハブの立派な建物でござります。坪当たり天皇陛下のお家よりが高いというふうな、そういう立派な家の中に住んでおり、温度もちゃんと十五度に調節しておりますから、外がどちらほど暑からうが寒からうが、部屋の中は気温十五度でピシヤツとなりてます。ところがテント生活の場合は、あのうすっぺらのテント一枚でござりますから、外の気温の変化がもろに伝わります。それよりまだ他の条件がともなつ

そして寝るベッドはといいますと、私がちょうどそこへ到達したときには雪の上でござりますんで、そこへ柴を敷いて、その上にテントを張つて寝てるというわけありますから、したがつて、文字通り臥薪^{がしん} 柴の上に寝てるので、決して寝心地はよくありません。

しかも食べ物はど申しますと、まあ南極は船やいろんなもので運んでいただけますから、立派なごちそつが毎日出ます。それは冷凍品でござりますけれども、ともかく大変なごちそつをちょうどいじっているわけです。ある隊員のごときは、「こんなぜいたくしていたら、東京へ帰つてからは安月給ではやつていかれんぞ」

なんて言つておりましたが、そしたら誰かが、「おい、お前帰れると思うどりのか」ということで話が終わつたこともござります。

またヒマラヤの場合でございますと、全部人間の肩で運ばなければなりません。一人の運ぶ目方は三十キロを超えてはならないといふネパールの法律がござりますために、我々の荷物、食糧品から登山の道具から一切合切を巡びますと四百五十人の人夫を必要といたします。しかもその四百五十人の人夫が毎日千メートルぐらいのところを下りては上がり——まあ逆みたいな感じがするけれど、だいい洎まる時は全部尾根の上で泊まつております。ネパールはござ

知の通り、下の方へ行きますと非常に疫病などがありまして大変暑いもんですから、それでみんな尾根の高いところで生活をしてるわけです——それで、谷へ下りて、 trifri 橋を渡つて、それからまた千メートルのところを上がつてくるといふわけで、あくる日はまたそこを下りて、また橋を渡つて……という式でやります。そして二日間かかるようやくそこまでたどりついたのでござります。したがつてその間というものはもう、荷物は十分運べません。

例えば書物なんかも重いですか、専門の書物はやむをえませんけれど、他の書物は各自一冊ずつと決めたんです。私も一冊しかもてないわけで、何の本を持つてい

つてやろうかなと思つて、はじめ考えたんですけども、まあせいぜい読んでいたらね、むたくなるような睡眠剤をも兼ねるような、そういう本がよからう。一冊持つていつたら、もついくら読んでも読み切れないよつな本がよからうと思つたんですが、たまたまホテルに泊まつておりましたら『ティーチング・オブ・ブダ』という本が置いてありました。ハハア、これを一つ持つていてやろうと思いまして、秘書に言つて買ひにやりまして、その『ティーチング・オブ・ブダ』という本を持っていました。

これはよかつたです。眠れなくなりますと睡眠剤にもなりますし、なかなか読み切れるもんじやございません

いません。いつこうにわけのわからんことが書いてござります。英語で書いてある仏教ですが、おどりいたことに私はそれを三、二へんも読みました。いかにひまであつたかがお分かりになるだろ、うと思つんでござります。

まあ話が横へ飛びましたが、そんなよつな生活でござりますので、食べものもしたがつてきわめて少食へない。まあヒツジを王として食べられてゐるんでございますが、これは、ありませんから、どこかやわらかいつところがないかしらと思つてさがしましたら、脳ミソだと、キモだとかというのがあるわけですね。これは隊長特別料理といって、ちゃんと別にしてござります。隊長特別料理といふとかにもいいよつてござりますけれども、朝も昼も晩もそればっかり食わされるのは余り感心したものじやないんでござります。

その上にまた酸素が少なくなり

しておりますんで、もう骨と皮とになつてゐるやつなんです。そ

いつをズバッとやつて食べるんでござりますけれども、私のよつな

こついう入れ歯の人間では、とつても硬くて、それは食われたもん

じゃないですよ。それでしようが

ありませんから、どこかやわらかいつところがないかしらと思つてさ

がしましたら、脳ミソだと、キ

モだとかというのがあるわけですね。

これは隊長特別料理といって、

ちゃんと別にしてござります。隊

長特別料理といふとかにもいい

よつてござりますけれども、朝も

昼も晩もそればっかり食わされる

のは余り感心したものじやないん

ます。まあ内地におります時には酸素みたいなもん、どうでもいいと思うておりますけれども、さて空気が少なくなつてきますと空気の有難味というのはよくわかります。

何でも物事は考えよ

まあそんなような生活をしておつたのでござりますが、それは南極からみたらはるかにきつい生活でござります。しかも私の年齢も南極の時からくらべますと、もう大分たつておりますし、そんなようなどころで実際、ふつうならまあ楽じゃあございません。けれども先程申しましたように、物事は何でも考えようだ、ということで

私は進んでおりますし、どんなにかつらうことだと人が見るよつなことでも、これはいい経験だなあと思って何でもやりますものですから、むづろ楽しくてしようがない。

しかし、あれがもしやらされていると思っていたらもつあんなもん一日もかなわないです。自分でやつてあると思えばこそ、うまいこと楽に行けるんです。会社に勤めている若い方々にしても、同じやらなければならんのなら、自分でやつてているのだと思えばよきえうなもんですが、まあそんなこと思つたらお給料上げてもらえないからというんでしようか。われわれの方は別にお給料とは関係ございません。したがつてまあ、何事も自分でやりたいからやつて

るのだという気持でござります。しかしながらやつぱり生理的には、ずいぶん無理していただとみてまして、お風呂も三ヶ月半一度も入つたことがないわけでございますが、からだを拭くぐらいのことはやるんです。ハダカになつてみて、何とまあようやせたなあと、実はピックリギョウテンいたしました。帰つてから目方を量りました。たら十キロ減つておりました。あと、これはすぐがすがしくなつたなあと、実際そつなんです、岩登りなんかいたしまして岩の間を歩きました時も、まるで仙人がやつているようにヒラリヒラリと本当に身が軽くて、おまけに先程申したような本でも理解できるようになつたということは、頭がものすごく

さえてきてるんですね。内地にいるときに、いかにいらんことを思つてました。

必死ということ

まあ、つまらんことを申しますけれど、そこは植林限界（森林限界か？）なんですが、そこからベースキャンプまでかけますのは、ずいぶん道の悪いところ——一道ではありません、氷河の上でございます。大きな石がゴロゴロしておりますし、その石の横の氷河は氷の壁でございまして、その下に池が必ずできております。そこで足一つすべらしたり、岩からころんだら、そのガケを落ちて、

池の中にジャボンとはまるわけです。もちろん池の上には氷が張つておりますけれども、そんな氷ぐらいたるのを四日間歩いたんですけれど、今申したようにからだが軽くなっていますのでヒラリヒラリと行けるんです。しかし、残念なことに貯蓄がないもんですか、すぐエンストをおこしてしまいます。もう歩けないようになります。しょうがありませんからハチミツを溶かしてある水を飲んでガソリンがわりに入れますと、まあちょっとエンジンが動きますけれど、またしてもエンストをおこしてしまいます。これはなかなか進みません。最後の四日目ぐらいになりましたら、もう全然動かうコトバがどういうことを意味しているのかが、ようやくわかったんです。必死というやつは本当に苦しいもんですね。もつともあれは、必ず死ななければいけないものなんですけれども、いよいよ歩けんようになりますと、私自身を叱りとばすんです。「コラ！まだお前は生きているじゃないか！」生きていたら歩かないといかんですね。必死なんですから必ず死なないといかんけど、まだ死んでないから、まだ歩かなければしょうがない。それでモタモタ歩きますと、またへばつてしまふ。どうと

ないようになりました。

その時初めて私は「必死」というコトバがどういうことを意味しているのかが、ようやくわかつたんです。必死といつは本当に苦しいもんですね。もつともあれは、必ず死ななければいけないものなんですけれども、いよいよ歩けんようになりますと、私自身を叱りとばすんです。「コラ！まだお前は生きているじゃないか！」生きていたら歩かないといかんですね。必死なんですから必ず死なないといかんけど、まだ死んでないから、まだ歩かなければしょうがない。それでモタモタ歩きますと、またへばつてしまふ。どうと

注射を一本ブスブスとうつてくれて、まあようやくベースキャンプにたどりついたんです。

隊長の任務——激励ということ

そこは五千三百メートルの高い所でござります。しかし私たちの登ろうという山はヤルンカンという山で、皆様は多分ご存知なうのがあたり前で、その山の名前をつけたのはわれわれでございますから。しかし、その山は八千五百メートルと私たちの測量によつてわかりました。世界で五番目に高い山でござります。そんな高い山がまだ登られずに残つていたと、いうことはふしぎなくらいでござります。

います。あのマナスルは八千百四十メートルございますので、まだ四百数十メートル高いのでござります。こんな山に登るということは容易なことではございません。私の登りました五千三百メートルも所からまだ三千二百メートルもあるわけです。つまり、そこから富士山ぐらいの高さこの所まで登らなければならんわけです。

もうその辺になると空気がすっかり弱くなつており、非常な困難です。もう氷がガガとしておりまして、その間に道を探すことさえ、大変な苦労でございますが、幸い文明の利器が利用できます。非常に強力な望遠鏡を備えつけまして、それで道をずっと探すわけです。そして無線機械を持っておりますから、トランシーバーでもつて、右行け、左行けということを指図することになつておるわけです。

当時独身の人も結婚いたします。

そうすると子どもが生まれる。十

年たてば子どもは小学校へ行くよ

うになっているわけです。小学校へ

行く子どものおトッチャンたちで

すから、今さら私が行つてですね。

「あんたたち気をつけなさい、危

ないで、危ないで」てなバカなこ

とを言う必要は毛頭ありませんで

すね。むしろその人たちのような

年になりますと、やつぱり物事に

おつくくなったり、まあヘッピ

リゴシになる心配があるので、む

しろ私としては激励するのが任務

だと思っておりました。しかし、

なかなか激励というものはむずか

しいこととして、今度は「ガンバ

援団が太鼓たたいているような具

合にはちょっといかんわけです。

で、一体どうするのが一番いいん

だろかということを日頃考えて

おりました。

隊長になつた羽田 ——非常識な決断

「何を言つか、バカヤロウ！　お

前がわしについてネパールの皇太

子の結婚式についてきたんじゃな

いか、あの時にお前が言つての

がちょうど南米の旅行から帰つて

きて、羽田に到着いたしましたと

ころ、若い人がやつてきて、

「あの、ヤルンカンの許可証が下

りそぞうでござります」

「どうか、そりやよかつたなあ」

と、その時まるで他人事みたいに

私は言つていたんです。ところが、
その若い人が私のうちへ来て、
「あの許可証を一年先にのばして
もらつよつに、もう一ペんネパー
ルの政府に交渉していただけませ
んでしようか。西堀さんはネパー
ルでぜひお願ひします」

「何を言つか、バカヤロウ！　お

前がわしについてネパールの皇太

子の結婚式についてきたんじゃな

いか、あの時にお前が言つての

がちょうど南米の旅行から帰つて

きて、羽田に到着いたしましたと

ころ、若い人がやつてきて、

「あの、ヤルンカンの許可証が下

りそぞうでござります」

「どうか、そりやよかつたなあ」

と、その時まるで他人事みたいに

準備ができませんから、一年のば
して下さいとは、何を言つか、バ

カモン！」

「言いましたら、

「どう考へても今から勘定します

と、十二月の終わりに荷物を出さ
なきやなりませんが、もう間に合
いません」

それで私は、

「さつきから聞いてると、お前は
常識的に考へたら不可能じや、不
可能じやとばかり言つてゐるじやな
いか。不可能を可能にする方法と
いうもんをお前知らんらしいな」
「はあ知りません」

「それじゃ教えてやる。非常識に

やれ、非常識に。常識的にやれん
というなら非常識にやつたらいい
んだ」

「こう言いましたら、分かつたの
か分からんのか、京都へ飛んで帰

つてゆきました。それからしばら
くたつたら今西錦司君というのが
私のところへ電話をかけてきました。
これは岐阜大学の学長をついこの
間までしておりました山の先輩と

いうかまあ同輩でござりますが、
サルの研究家として有名な男でござ
ります。こいつが電話をかけて
きました。

「西堀君、すまんけど今度は一つ、
このヤルンカン登山の遠征隊の隊
長になつて、どうしても行つても
らわんと困るんだがなあ」と
「こう言つんです。

「そんなんムチャ言つたつてしよう
がない。突然そんなど言つてき
たつて、ダメだ」と私が言いましたら、

「君は若い奴に、不可能を可能に

するには非常識にやれ、ちゅうた
んどちがうのか。君、非常識にや
つたらどうや」と一々言います。

弱つたなあ……。常識的とい
のはどんなことかしらんと考え
みますと、常識というのは、今晚
一晩よく考へてから決めるとか、
あるいは女房によく相談してから
決める、というようないじらしい
んで、非常識といふのはそれをや
めることだな、と私は思いました。
それすぐりに受話器持つたままで、
「そんならもつ行くわ！」

正直に言つと、当時このヤルン
カンという山がどんな山なのか余
りよく知らなかつたのであります。
が、ともかく、石橋をたたいたら
渡れない、ということは自分から

も言つてゐるぐらいでござりますか
ら、「ほんなら行くわ！」という
結果となり、電話切りましたあと、
女房に

「おい、行くことにしたで」
と申しました。

「あ、たは、いつでもそれですかあ」
とこゝいうことでござりますが、
まあ正直に言つて、もし女房に相
談してから決めたとした、

「そんな年がいもない。おやめな
さいよ」
と、さんざん言われるに決まって
おります。遂に、「それならやめと
くか」ということになる可能性も
あつたんですが、もう決めてしま
いましたもんですから女房として
もどうにもなりません。

「あなたはいつもそれですかあ、

一ペんお決めになつたらもうあと
へ引かれないのでやから、もう行つ
てらっしゃい。そのかわりまあ氣
をつけてね」ぐらいのことで、登
山許可証がもらえたわけでござ
ります。

山許可証がもらえたわけでござ
ります。

そんなようなことで、いよいよ
私が非常識にやらなければならん
ことになつてきました。まだ金が
一文もありませんし、それからま
あいっぱい荷物を集め、これも
非常識にやりましたおかげで十二
月の末日にはピシャリと整いまし
た。

困るに決まって、いるんだけどな、
まあ言つてみればあれは聯隊旗み
たいなもんやなあ」

まあ若い方にはわかりにくいか
もれませんけれども、昔はある
聯隊旗というのが大変大事にされ
たことがございました。確かに唯

いうのがあります、これは私の
山の後輩にあたるわけでございま
すが、この男が壮行会の時にあい
さつをしてくれました。

壮行の辞——聯隊旗と守り神

さて、いよいよ出発の前になり

ましたら、ご承知の桑原武夫君と

物論的に考えますればあんな聯隊旗というよくな、ボロボロの、捨てても価値のないようなものを戦場に持って行つてもクソの役にも立たんのだけれども、まあそこに何だかしらん曰く言い難き味があるというか、価値があるというこそでございましょうと思ひます。

どうどうこの西堀みたいな立派な人間をハタにたとえるとは何事じやと思つたなんですが、まあガマンしております。

それから今度は、今西錦司という先程のヤツがやおら立てて、今度は壯行の辞を述べてくれました。「西堀と俺とは、中学時代からずうつと一しょに山へ登つてゐるのだけなあ、あいつのその山の登り方というのはムチャクチャでもつ

て、ヤンチャ坊主で、冒険好きで何をしているかわがらんくらい横着な山登りをしているんだけれども、しかし、あいつは運のええ男でなあ、今だかつて遭難したこともないし、そして登るうと思つた山は必ず登つてゐ、あいつは運のええ男や、したがつてあいつと一緒に山へ行つていたら、もう安心して登れる。だからまあ言つてみればお守りみたいなもんやなあ。

諸君に、この西堀というお守りを持たしてやるからな、まあ十分活用せえよ。」なるほど私もたしかに運のいい男でございますが、しかしその運は、天から降つてきたり地から湧いてきたりするようなものではなづいたが、この方がやおら立ちになりました。「私でございます」と。まあ私はそこにおりませんでしたからその通りかどうかは存じませんけれども。

めの相当の努力を積み重ねたゆえのもののように思ひます。

日本一慎重な男

ある時、国会関係でもつてある代議士の方が、

「西堀というあのヤンチャ坊主の冒険好きの人間を、一番慎重を要する原子力の方などへ連れてきたヤツは一体誰じゃ！」とどなりつけておられたことがあります。もう亡くなりましたが、石川一郎さんというのが私たちの上役でございましたが、この方がやおら立ちになりました。「私でござります」と。まあ私はそこにおりませんでしたからその通りかどうかは存じませんけれども。

「西堀という人は大変慎重な男で、

慎重さでは日本一の男です。山の

登り方をみても、いろんなことの

やり方をみても皆そろです。だか

らこそ南極に彼を行かせたのでござります。

そしてその任務を無事

終えて帰つてまいりました。彼は

わが国で最も慎重憲男でございま

す。したがつてその慎重な男を最

も慎重を必要とする原子力の方へ

さし向けたのは適切な措置であつ

たと思うのであります。ただ彼の

慎重といふことばの中には、『だか

らやりません』といふことばがな

いだけのことです』

と、それで代議士の方は黙つてしまわれたという話がございました。

確かに私も山登りいたしますについても自分では非常に慎重にや

つております。

隊長は責任を

隊員は能力をフルに發揮

で、二人の挨拶の後でいよいよ

私がいきつをしなければならぬ

ことになつたわけですが、そこ

で一体私は何のために登るのかと

いうことについて話しました。激

励のためです。激励というものに、

一番大事な方向として、どんな効

果的な方法があるかと日頃考えて

おりました。

「ともかく私はこのたび隊長に選

ばれました。選ばれました以上は

隊長の玉音放送

さて、ヤルンカン登頂をめざし、ベースキャンプにはその隊員の人

と申し上げました。同時に隊員の方を向きました。

「諸君よ、私が全責任をとるから、あなた方は失敗するなどという風

なことはいささかも考えないで、ひたすら自らの能力をフルに發揮

するにはどうしたらいいかという

ことを、一生懸命になつて考えて

やつて下されや。失敗しても責任

は私がとつてあげますから」

と申し上げたんでござりますが、

これが私として精一杯の激励であつたと存じています。

たちが全部集まつておりました。

私は日頃無線でもつて指令を出し

頂上へ登れば、それで全員が登つ
たんと同じだ……」

私は日頃無線でもって指令を出しておりますんでございますが、不幸にして私のほうの無線の機械が故障をおこしていましたために受信ができない。片一方からだけ送信ができるという事態が起きました。私の方から言つた声はきこえる。それで皆が玉音放送と言つてました。その玉音放送において、いつも申し上げておるんですが、

「私たちの隊の共同の目的」というものは何であるか、皆で、この共同目的というものを果たさうじゃないか。決して隊長の命令でもつてどうするこうするというような人が人を使うような態度で物事をやるんじゃないんだぞ。私たちの共同の目的というのは誰か一人が

頂上へ登れば、それで全員が登つたんと同じだ……

これはあたりまえのように皆様方思われますけれども、外国ではそうは言つてないです。誰かが一人頂上へ登りましてもあくる日もしいい天気だったら、それなら俺も登るわ、またその翌日いい天気なら、わしも登る、俺も、俺もと皆登つてるんですね——。これは個人主義の反映でござります。

私たちの場合は一体となつてチームワークでやつているんでありますから、頂上へ行く人はわれわれの隊員の代表として行くんで、その人が頂上へ登れば全員登つたのも同じ。この七十歳の老人も登つたことになりますから、はなはだ都合がよろしい。

そういうふうに日頃から言つてゐますと、隊の中では仕事の役割をそれぞれ皆持つてやってくれてはおりますけれども、その仕事に貴い賤しいということがないといふこと。ずっと食事のことばかりやつてくれている隊員もおりますけれど、それを他の人が「へらメシたき!」なんてことをもじと言おうものなら、これはもうホッペタをひっぱたくよつなムードです。また本人も、「俺が縁の下の力持ちでやつてるからできうるのになあ」と、そんなことを言つても、これまたピシッとひっぱたくぐらいいのムードがないといかん。みんなやつてゐる仕事は全部貴いんだ。だから頂上へ行くやつは英雄でもな

んでもない。『あいつは必死になつて行つてるのだから、あれは必ず死ななければならぬのだから、かわいそきうなやつだ』とみんなが

同情こそすれ、また感謝こそすれ、そんな人にいばらしたり、また他の人がそきういうふうに考へるといふことはどんでもない間違いです。

まあ時間がござりませんから省略いたしますが、結局幸いにして頂上に二人の隊員を立てる事ができました。これはヒマラヤ登山の歴史の中で滅多にないことござります。たいたがいは何べんも何べんもしくじて、そしてようやく頂上に達するんでござります。

ヒマラヤのマナスルの場合でも四回目でござりますから、われわれの場合は、いきなりやつていきな

り成功したわけで、實に輝かしい歴史だつたと、まあ自分で自慢させていただきます。

隊員の死

しかしながら帰りに隊員の一人が死にました。これは酸素不足のためにでした。もうあと五十メートル下まで降りてたら酸素がちゃんとおいてあるデコがござります

んですけど、そこへどうとう行き着けないで亡くなつたわけであります。この酸素がなくなりますと、まず最初に頭がボケてまいります。日頃から酸素の足らん方もいらっしゃるかもしませんが、ともかく目が見えんようになります。

「おい下りるんだぞ！」上へ行くんとちがつぞ！」

と言おうとしても、どうしても通じないんですね。とうとう上へ上へ上がつていつたままで、そこでまた……、幸い救援隊が行くまでじつとしていてくれましたもんですから助かりました。

の結果として、判断を誤りますから、転落するわけです。

になつた隊員がおりました。その男は、あと二十メートルそばまで

がつていつた。その時、無線の機械が故障をおこしておりましたんで、下から

責任を負うとはどういうことか

「このような大事件が起こりました。私も隊長として大変な事件が起こつたものでありますから責任を負わなければならない。さて、そつなつた時に、一体責任を負うということはどういうことなんだろう。日頃、簡単に「責任を負います、私は責任者です」と偉そくない」と言ってましたけれども、さてとなると、これはちょっと分からんようになつてしまつたねえ。株式会社でございますれば、カンパニー・リミッテッドですからこれはリミットのことだけやりさえすればそれでいいのでございましょうけれど、われわれのことは、どうも反省することら

ところではリミットは無限でござります。だからどうにもしようがない。

その亡くなつた隊員というのは執念の男でございますので、先程申しましたようにネバールへ連れて行つて交渉させたような中心人物でござります。その男は登れるまでは独身でいると言つてがんばつておりましたので、妻もなし子もなしで、その点でやや気が楽なよう見えますけれども、そんなことで私の責任がのがれられるわけではありません。一体「責任を負うということはどういうことなんだ」本当に私は考えましたけれど、いまだにわかりません。

まあ、こんなよくなーことが、私が今日までやつてまいりました生き方の一部でございますが……、どうぞ、こういう生き方もあるなあと、一とで聞き流していただければありがたいことと思ひます。



「本物 とは何か」

藤本 博

(厚木中央青年の家所長)

いたいことを言つたら後で訂正していただくなつもりで、思つたとおりのことを申し上げたい、というふうに思つております。

ただ、そういうつもりで来たんですけど、今、お話を承つておりますと、だんだんしほんでまいりました。(笑) 西堀先生、ひじょうに難しいことをさらつとおっしゃるんで、私はガッカリしちゃいました。(笑)

その五年後ぐらいだそうです。私は大正十二年ですから、みな大先輩です。それで青年の家におりますと、いつも最年長者でござりますので、でたらめなことを言つわけにもいかず、ひじょうに慎重にやらなければなりませんが、きようは、私が一番若年ですので、言

は遊んでいてもくれるものですか、一年間、何もいたしませんでした。そして、あらゆる団体を見学してきました。何でもいいから、団体と称するものは、どんな処へも出かけて行つて見せてもらいました。二年たつてから、これじゃいけないんぢやないかなと思つて、今の仕事を始めたわけです。

その頃——私は、人間の出会いの不思議さ——いうものを感じました——実は和田先生が、私の青年の家を貸してくれということで、おいでになつたんです。着物の着流してこられまして、あの、散歩に來た、という格好でしたけど。(笑) 「はじめ塾」という塾だけど、一週間ほど貸してくれないないか」と言つんで、「はじめ塾だかおわり

十五年前に青年の家ができまして、私は一年間、遊ばしてもらいました。県の役人ですから、給料

塾だが知らないけれど、ここは塾には貸さない」と玄関先でお断りしたんです。塾だというから、金もうけをしてるのかなあという感じがしてお断りしたのですが、一面、将来、私もやりたいな、なんでも思いました。ただ、その和田先生の帰つてゆく後姿をずっと見てまして、ほんの二言三言のお話の中でしたけれども、私ちょっとと感じるものがあり、追つかけてゆこうかなあという気持ちもあつたんですね。そこは役人ですから、営利団体に貸して、後で月給に關係してはと思いやめました。

そして三年目に、和田先生の『葦かびの萌えいざる』の本が出来たわけです。たまたま私とこの小使さんが、この本の書評を新聞でしたか雑誌でしたかで見まして、どうもこの本が面白そつだということで、推せんしてくれまして、さっそく取り寄せたわけです。今、私どものところに中学生・高校生・大学生のボランティアの人たちが来ますけれども、そういう人たちに読んでもらい、勉強してもらつようになつてますが、何か私は、出会いの過ぎ去つたものを感じております。

「私のところでは、いつさいの『べし・べからず』はないんだ」と言つと、動けない。決めてもらわないと動けないんですね。私がよく話す話は、すけれども「おかしいじやないの。皆さんのが追求しようと考えているわけです。『理屈では』と、すぐ皆さんのはおっしゃるけれども、理屈ではなく、経験の中、しかも体験の中からそれを引っ張り出してほしいと

いうよつなつもりで、今、青年の家をやっています。

ウソでしょ。走らなきゃ焼けちゃうじゃない。(笑) この場合、走らなきゃだめでしょ。だけど、授業をしてる間に、廊下をカタカタ走られたら困るでしょ。その走るか走らないかを考えるのは自分でしょ。自分で考えて自分で定めるんじやないか』

ところが、神奈川県の学校というのは、校長さんや先生が決めちゃって、それを守らないとぶんぬぐる…とそんなふうになつておりまして、何かそこにおかしいことがあるんじゃないか。もう一回、ここで考えてほしいと思います。

西堀先生は非常識という言葉を使われましたけれど、先生のお話を聞いてみて、すごい判断力だな、と感じました。淡々とお話になり

したけれど、その間に頭をクルクル回さなきゃわからなくなるようだな、判断力をとして決断が大切な、ということを感じました。

また、先生、ずいぶん孤独の中に入つていくんだな、ということを感じましたけれど、私も非常に大勢の青少年といつしょに生活しております。その中でいつも、自分自身が孤独だな、と思いふりかえつた時、自分一人しかいない淋しさを感じています。

それに対しても先生は「自分自身を叱りとばす」とおっしゃる。自分自身叱りとばすくらいわけない、と思いますけど、なかなかそれができない。その弱さというものを私自身感じますので、そういうこ

とから今の人達が、ひじょうに既成概念にとらわれているな、といふことを感じます。

どうしてあんなに決めちゃうのか。たとえば、食事は一日三度とする、と、どこにも書いてないじゃない。なのにみんな三回食べる。「私のところはやらないよ」って言つと、変な顔される。(笑)

夜寝る時には布団ひくでしょ、決まつてゐみたいなことですね。馬なんか、布団ひかないで立つて寝てる、どうもそれはよくわからないうらい。なんかそういうもう決められているんだ、というようなことについては、私のところでは窓放してます。自分で考え、そして、いいと思つたらおやりなさい、悪いと思つたらおやめなさ

い、それだけです。私のところの規則はそれだけです。ただし、き

ょうは中学生が多いから、高校だから、ということでことわりますけど。

中学生の時なんかは、規則はないけど、一つだけことわらしてもらう。

三日間いっしょに生活していくけれど、ぜつたい「いいですか」という言葉は使わないで下さい。たとえば、

「テレビ見ていいですか」

「ステレオ聞いていいですか」

「そう言われても、私どもは、「知らないよ」と言いますから

「つめてえなあ」なんて言わないで下さい。(笑)これが我々の、あ

なた方に対する最大の愛情なんだよと言います。

そしたら、休憩時間なんかに中学生が事務室に入ります。そして、私の顔見て、

「おじさん、『テレビ見ていいですか』って言っちゃいけないんだよね」

つて。(笑)

「(一)の所長は冗談がすぎる」

「言つていいことと悪いことがある。人をつかまえてドロボーとは、あまりにも人権蹂躪だ」

「まあ、冗談だから許せるけど」と。

「私は冗談なんか言つたことはない」

「だつて今、私のことドロボーつて言つたじゃない」

「確かにあんたにドロボーと言つた。他人の引出しを開けて黙つてハサミを持っていつたら、ドロボ

など、事務所にカツカツと入つてくる。そして、人の引出しをガラツと開けるんですね。そしてハサミをちょっと掴んで持つていっちゃうんです。(笑)私はびっくりして「ドロボー!」

すると、

「ふと開けるんですね。そしてハサミをちょっと掴んで持つていっちゃうんです。(笑)私はびっくりして「ドロボー!」

「じゃない」

「だつて、所長が開催式の日に、いいですか、つて言つなつて言つたからいと思つて持つてつた」つて。そこで、私は「主体性とは何か」ということを考えさせられました。主体性と身勝手との区別がわからないよつなりーダーがあまりにも神奈川県に多いということを感じます。

なにかと「政府がこう申します」「うちのメンバーがこう申します」と、何かとバックを意識している。主体性というのは、お互いがもつてている。私たつて主体性をもつていて。あなただけが主体性をもつてゐるんじゃない。もう少し「本物というのは何か」を考えほしい、と思つのです。

私は、きょう（一）までまいりましたけれど、残念ながら本厚木の駅には新幹線が通つております。小田原は止まりますけれど。けさは早かつたですから、早く出なければならぬ。できれば新幹線で行きたいと思つた。鉄道に電話をかけて、本厚木に新幹線をまわせと言つてもそれはムリだ。私は主体的に行くんだから、と言つても行かれやしない。あれは鉄道の主体性でつくつたものだから。

新幹線に乗つて遠出をします。ビュッフェで昼めしを食つか、駅弁を買つか、それは私の主体性です。だけども、ビュッフェで食べると決まつた時に、あのメニューにあるもの以外に食べられない。これ気にくわない。私はこんな高

いもの食べたことない、お茶漬けにしてくれ、と言つても、やつてくれないわけですね。あのビュッフェの主体性とぶつかる。その時、私の主体性ともぶつかり合いがあるわけです。どうしてもゆずれないのなら、私は空腹をがまんして、ビュッフェを出でくればいいんです。どうしても食べなければならぬんなら、ビュッフェとの妥協があるだろう。それが主体性であり自主性であろう、そういう基本的なところから、我々は考えいかなければならぬといつこころにきているよつな、そんな気がするわけです。

もつ少し、お話をしようと思いましだけれど、西堀先生があまりにいいことをおつしやるんで、私

はそばで「そ、うだ、そ、うだ」とい
うばかりです。

実はこのお話をありました時に、
柏樹社の方から、西堀先生の著
書をおくっていただきまして、そ
れを読みました。先程お話をあり
ました『石橋をたたけば渡れない』
という本を読みました。すぐ柏樹
社のほうに電話をかけまして、

「実は、西堀先生の書いてあるこ
とに何も異論がない。対談しろと
言われてもそばで、そ、うだそ、うだ、
まつたくだ、じゃだめじゃないか、
出る価値はありません」と

私がひじょうに心配しまして、
もう一冊本を買ってきて、「これ読
め」と。それが、越冬隊長として
南極大陸で越冬された時の記録で
ございます。それを読みますと、
隊長の苦しみというもののが、私に
は、ひじょうにわかるような気が
いたしました。

最後に、先生は「『責任』と
いうことがいまだにわからぬ」
七十二歳におなりになる方が「わ
からないんだ」と。

私も実は、県としょつちゅう渡
りあいます。そして、最後は「責
任はおれが取りやいいんだ」と言
うんですけれども、どうとつてい
いんだか実は私もわからない。

「所長は山登りをすると、平らな
ところを歩いていても、よいしょ、
よいしょと歩いている。平らなど
ころは黙つて歩いた方がいいんじ
やないですか」(笑)

こんな批評をうけまして、来年か
らよそうと思つたのであります。
でも先生がこの高齢で、ヤルンカ
たわけでございます。(笑)

ますます、責任をとつてゆこう
かというふうに感じております。

毎年、元旦に若い者を集めまし
て、明神岳に登っておりますが、
明神岳は箱根の外輪山の一つです。

今年は登りましたけど、来年から
はよそうと、本当は心ひそかに思
つていました。というのは今年の

元旦、山から降りてきて、青年の
家の若い職員からひやかされました。

ンに登られたことを伺つて、私も
先生の『年齢までは続けようと思
い直したのであります。同時に、
私自身、もう少し真剣に生きてい
かなきや、いけないんじやないか、
といふことを感じさせていただき
ました。



時間がもつあまりございません
ので、ひじょうに幸いだというふ
うに思つております。(笑)



〔責任 といふこと〕

和田 重正
(はじめ塾)

いよいよおはぢが廻つてまいり
ましたが、先程、西堀先生がおつ
しゃつたように、酸素が欠乏する
と頭がボーッとしてくるそゝです
が、私はこのところ甚だしく酸素
が欠乏していて、お話をうかがつ
ている間は、「そつだ、そつだ…」
とうなずいているのですけれど、
もう十分もすぎると、それも忘れ
てしまつて、はてな、おはぢが廻
つてから、何を話そうかなと思

——本当に西堀先生のお話をうか
がつてみると、最初から最後まで、
感想だらけなので、どこからど
ういうふうに自分の感じたことを
お話をしたらよいか、わからなくな
ります。

それでも、まあ、欲ばつてもし

つて、大へんまつついでいるんです。

先程、藤本先生が『石橋をたた
けば渡れない』という西堀先生の
『本を読んで「そうだ、そうだ」
と思つことばかりだったとおっし
やいましたが、私は「そうだ、そ
うだ」なんていうどころでなく、「や
られた、やられた」とばかりで、

どうにもしようがないな、頭が上
がらないな、こういう方と並んで
お話をなんかさせられたんじやかな
わないな、と思つてしまします。

ようがありませんから、順序もなしに、まず「責任」ということについてお話しします。

私は、中学生を相手の塾をやっています。塾といつても盛大な塾ではなく、はじめ塾だか、おわり塾だが、おわり塾に近いんです……。

「……」で私は、一つの事柄として、子どもたちに、「思いつきり」のことをさせてみたくてしようがないのです。「思いつきり」というのがどういうことなのかは、自分でもよく分からぬのですが、強いて言えば、なにか野性のよくなものを取りもどさせてやりたい。文化的だと文明的だと、よく知りませんが、人間が、人間のつくつ

た人間の世界にだけ生きていると人間でなくなってしまって、今の子どもたちを見ていると、そういう感じがするのです。

そこで、子どもたちが——私のところに来ているのは主として中学生ですが、人間らしいものに戻つてゆく、そういう機会を与えたいな、思いつきりのことをさせてやりたいなど強く思うのです。

私が、なぜこんなことを思つようになつたのか、もうとさかのぼつて考えてみると、よく分かりますが、多分、自分の高等学校時代（旧制）の経験からではないかと思うのです。当時は全寮生でして、寮に入りますと、もう、無茶苦茶なこと、非常識なことをやりました。その非常識ぶりは、その

当時でも、ずいぶん批難がありましたけれど、その無茶苦茶なこと、非常識なことが、そろばん勘定以外の何か、この「いのち」を生きさせてくれたような気がするんです。

ところが戦後は、そのようなものが、だんだん失われてきている、中学生なんか見ていて、だんだんとちぢめこまつてきて、のびのびとした人間らしさというものをなくしてしまっている、これは可憜なことだ——これは終戦直後のことです。今日のような、勉強、勉強……といった時代ではないんですが、何か、そんなふうに感じました。

それで、子どもたちに、思いつきりのことがやれる場所をつくつ

てやりたい、と思つて、その頃、小田原の山のほうにあつた東泉院というお寺を貸してもらつて合宿をし、かなり無茶なことをさせてもらいました。

しかし、だんだんやつてみると、中学生たちのことですから、もうそちら中で迷惑をかけている、何とかして、本当に思いつきりのことがでてくる、人里離れたところに連れていけないかなあ……と思つてゐるうちに、現在の丹沢の山中にある一心寮という合宿所を与えられたのです。それこそ、ここでは、どんなに大きな声を出してても、他の人には聞こえないといった山の中です。

どうしなきやならないというのは何にもない。何にもないというのは、大体、私に規則をつくる能力がないし、ヘタなものをつくるんなら作らないほうがよいと思ってるんです。ただ、人間のつくつたものからなるべく遠ざかるようにな、というのが趣旨なものですから、ラジオとかテレビとか新闘だと、そういうものは持ちこまない。もう一つは、ここでお酒をのんじやいけない。ということだけです。

西堀先生の二本など拝見すると、南極に出動すると、みなさん適当にお飲みになつてゐるらしいんで、やっぱり、お酒を飲んだほうがいいのかなあと反省しているんです。今まで、規則がないわけですが今のところ、この規則を撤回しようと、何をするのかと申します

ようとは思わないんです。もつとも、中学生ですから……（笑い）。酒を飲んではいけない、テレビやラジオをもちこまない。それから、うるさい楽器、ジャカジャカジャンジャンなんていうのはいけない、まあ、そのくらいで、あとは任せている。

あの木登りというのは、落つこちてケガしないという保証はどこにもない。実際、子もたちがパ一と登つて、しかも、大きな木の枝から枝へ、ターザン一樣にみたいことをやって、ずっと向こうまで渡つてゆく、そんなことをやつているのを見たら、こりや大変だ、と思ひますね。

んが、やりたいものにはやらせておく、いろんな危険をおかしてでも、やるだけの価値があると思つてゐるのです。しかし、そつとして七年間、やっていますけれど、一度も大きな事故をおこしたことがないません。まあ、多分、大丈夫夫なんだろうと思つてますが、もし、事故がおきたらどうするかと、大ていい人は心配してくれます。

その他、この辺にはマムシがいます。何時かも、NHKのテレビが取材に来られた時、ちょうどそのマムシが出てきて捕えたところを放映して下さったんですが、

たくさんはないけど、時々出てくる。これなんかでも、今までそういうことはないけど、もし嗜まれたら、それこそ大へんです。

一心寮では、この他、いろんな危険なことがたくさんある。じゃあ、どうするか……。勿論、万一大発端というのは、世の中の人間の常識的な、面倒くさい、気ばつとばかりです。しかし、その時には、大へんな批難が起ころうにちがいありません。なにしろ、乱暴ざかりの中学生たちのことだから、やりすぎること、困ったことが起こらない保証はないのです。でも、もものことが起こつたら、どうだるうと常識的には心配なことばかりです。しかし、私は、万一一の時には、全責任を私が負おうと思つてやらせている。

そもそも、こういうことを始めた発端というのは、世の中の人間の常識的な、面倒くさい、気ばつとばかりで、いなけりやならない

生活——大きな声を出したら隣りの家から文句が出たり、廊下を走つたら先生からどなられる……と言つた、小っちゃなことに気はつかしつかっていなければならぬ生活をしている子どもたちと世間との間に立つて、子どもたちの防壁になつてやるうと思つて、始めたことなんです。

それが自分にやれるかどうか分からぬけれど、なつてやるつもりでいます。ですから、子どもたちのことは、全部自分が全責任を負つてやる、とこう思つているわ

西堀先生のお話から、この他、いろいろなことを教えられました

最近、新学説を考えつきまして、新学説というのば、これまでの宗教的な説明でない、人間とか生命とかをどう考えるかということなんです。なにしろ宇宙の始まりから、単細胞生物ができ、多細胞生物が生じ、それから何億年かの時間を開けて高等動物を生じ、遂に今日の知能をもつた人類にまで発達、進化してくる中で、人間をどう考えるかという話ですから、要約するだけでも三時間はかかるなつているのだろうと思つていま

す言葉で表現されて、まったく、こういう言葉でいうと、本当にピントくるんだなと思つて聞かして思つていましたら、また藤本先生で今、責任をとるとは何な

う言葉で表現されて、まったく、こういう言葉でいうと、本当にピントくるんだなと思つて聞かしていただいたんです。

と言つのは、実は、私は、ごく最近、新学説を考えつきまして、新学説というのば、これまでの宗教的な説明でない、人間とか生命とかをどう考えるかということなんです。なにしろ宇宙の始まりから、単細胞生物ができ、多細胞生物が生じ、それから何億年かの時間を開けて高等動物を生じ、遂に今日の知能をもつた人類にまで発達、進化してくる中で、人間をどう考えるかという話ですから、要約するだけでも三時間はかかるなつているのだろうと思つていまします。

それで、ヒントだけ申し上げる

と、——生物が個体としての経験を獲得するということであれば、個体が死んでしまえば、その経験は何も意味がないし、進化ということは考えられないと思うのです。

新しい経験をつむどいことは

もっと大きな意味がある、個体というか、個的生命というか、それは単細胞生物以来の経験的知恵を内包していると考えるのであります。

そんな意味で、西堀先生の「経験をつんでゆく」というお言葉を大へん興味ばかりお聞きしたのです。

もう時間がなくて、中途半ばな話になってしまいまして申しわけありませんけれども、一応、このくらいにしておきます。

西湘まみず会
通 信 第十二号
昭和五十一年二月

視野を広げる

ものごとの判断をよくするためにには視野を拡げなければなりません。この前の戦争のとき、ノモンハンで敵が退却するので喜んで追っているうちに敵の包囲網の中に入り全滅した日本の大部隊があつたという話を先日読みましたが、これは司令官の視野が目前の敵部隊に限られて広い範囲の様子を見ることができなかつたために起つた悲劇でしょう。

われわれの日常生活の中でもそういうことがいらっしゃります。うまい儲け話につられてマンマと詐欺にひつかかる人がたくさんいます。若い女の子の中にはテレビに出してやると言われて体も芯も犠牲にしてしまうものがいるそです。一流大学に入るるために小學生の頃から何もかも顧みずに点取り勉強にばかり励んでいるつちに人づき合いの何たるかを弁えない精神的かたわになつてしまつ青年も数え切れないほどあります。地位を追うて二十年、定年退職したとき淋しさと虚しさに身の置き場のなくなるサラリーマン、同様に子どもを唯一の生き甲斐とする母親が、子どもに期待を裏切られたり、子どもが一人前になつて母親の手の届かぬ別家庭の人になつてしまつたりしたとき、はたの目

にも気の毒なほどあわてたり、嘆

とはどういうことでしょう。

いたりすることも珍しくありません。

ともかく、何かをアテにして夢

中になつてそれを追いかけている

と、フト我にかえったときに、もう取り返しのつかないところへはまり込んでしまっていることがあります。

これは当面の敵を追いかけることに夢中になつて伏兵のあることを忘れていた司令官のようなものです。

われわれは敵の包囲下に陥らなければ役立ちません。それにはいつももつと広い視野をもちねばなりません。それには遠目がきくことも必要ですが、それよりもっと、大事なことは視角を拡げることです。

では人生に於いて視角を拡げる

それは政治経済法律歴史地理科

学——科学の中でも何十とも知れぬ分野に分かれています。それから文芸美術栄養料理農業天文気象

哲学宗教スポーツ趣味その他、とても挙げきれませんが、そのような人間の知的営みの各分野の知識を広く網羅することだと思つ人があるかもしませんが、それはとんだ間違いです。そういう知識は

いくら豊富になつても人生が戦場で敵の包囲に陥るのを防ぐことに役立立ちません。

人間の欲望といふものは、どんな高級に見える欲望でもそれだけに心を奪われて夢中になつていると必ず敗北（行き詰まり）に至ります。そうなるように人間はできているのです。

しかし欲望を満たさうと熱心に努力する——ことがわるいわけではあ

る欲望例えば金銭欲とか情欲に夢中になつてそれを追いかけて

りません。いや、熱心でなければならぬのです。いい加減の中途半端な求め方では折角の欲望の本当の味わいを知ることができないからです。

それではどうしたらよいかと言ふと、自分の中のいろいろな欲望を冷静に観て、それらの欲望の間のバランスに支障を来さないかどうかを自ら測つてみることです。

こういうと、大変むずかしいことを要求しているようですが、実際そのつもりでやってみれば簡単なことです。はやく言えば、「自分がほっぽらかして特定の欲に目がくらんでいはしないかと落ちついて「自分」の中をよく見直してみると、ということです。これを知らないで一つの欲望にはまり込んで

でいるとしまいでは必ずバカをみる事になるというのです。

だからわれわれがバカらしくない人生を送ろうと思つたら、時々一度でいいから、じつと自分の中を見直してみる必要があると思うのです。

だが自分で自分を見るなどということができるだらうか、と思われるかもしませんが、それは簡単なのです。自分の欲望群の有様を一段高いところから眺めれば欲望群全域を見渡すことができるわけです。

人生についての味わいの方の深さを挙げることができます。戦後三十年間の変化は我々昔の青年をして長嘆息せしめるに足るもの

があります。老人を嘆かせるくらいは問題ではありませんが、人生についてもう少し深い理解を持たなければ、この人たちはただの空しい泣き笑いの一生を過ぐすことになるだらうと思って、余計なお節介ながら、黙つて見ていたれない気がするのです。

人生の味わい、と言つても「人生とは何ぞや」とか「人間如何に生くべきや」などと大上段に振りかぶつたような問題を初めから考えよう、というのではないのです。いずれ行く行くはそのような大づかみないわゆる人生観の問題に達するでしょうが、いま差し当たりはそのような概括的なことでなく、われわれが生きていく上で遭遇する問題の一つ一つについても

う少し深く考える習慣をつけても
らいたいと思うのです。ところが
いまの青少年の生活には、そのよ
うな問題について深く考え、味わ
う構会が与えられていないのでは
ありませんか。何かよいキッカケ
を与えなければ彼らは空しく青少

年時代を経過して、悪くすれば生
涯を目先の利害得失に振り回され
て、スルメの表面についた塩をな
めたような生涯を送ってしまうか
かもしれません。

自分の過去を振り返つてみると、
小学生の時分にすでに大きな疑問
をもつていたようです。例えば「ど
うして大人は自分勝手になんでも
できるのに、子どもは許されない
のだろう」とか「どうしてウソを
ついてはいけないのだろう。ウソ

をつく方がトクになることがある。
いけなくともトクになる方がトク
だから……」など考えていましたよ
うです。しかしそれは極めて漠然と
したもので、考えたというより、
気がしていた、という方が正しい
かも知れません。

ところが中学生になると心に浮
かんでくる疑問はもつとハッキリ
とした形をとり、内容も堂々たる
人生問題でした。中学一、二、三
年の間に私の心に強く浮かんでき
た問題は結局自分の一生の課題と
なりました。例えば「この時に、
この国に生まれ、この親の子とな
り、この兄姉の弟となっているこ
の自分はどこから来たのだろう。
何によってこういうことになつて
いるのだろう」とか、「大人が教え

てくれる道徳は守る方が得なのか。
守らない方が自分には得になるの
ではないか」それから最大の疑問
は、性についてです。性の何
が問題なのは自分にもわからな
いが、ともかく、性に関するこ
は何から何まで強い興味と不安の
種ならざるはなし、という状態で
した。また「死んだらどうなるの
だろう」ということも心のどこか
でいつも問題になつていきました。
その他数え上げたらキリがないほ
どの疑問をもつっていました。

それらの問題はかなりハッキリ
した形で意識していましたが、少
年の私には、「これは子どもっぽい
幼稚な疑問で大人にはわかり切つ
たことなのだろう」と思われたの
で、なるべくその疑問を避けて通

ろうとしたものでした。

この自分の経験を顧み、そして今の少年たち見ると、彼等もやはり同じような問題を心のどこかに感じているに違いないと思われるのです。それを彼等もやはり「子どものクダラナイ疑問だ」と思つて見て見ぬふりをして通つてゐるのだと思います。ただ我々の少年時代はベンキョウや点数などという怪獣が今ほど猛威を奮つていなかつたので心の底に湧いてきたそれらの問題を眺める精神的余裕がありました。しかし今日の少年たちにはありません。これは人間の子にとつては決定的な不幸です。

「自分を知る」という人間最大の特徴を放棄したことになるからです。

それはともかく、子どもも中学生ぐらいになると人生の最も根本的なところにつながる奥深い問題になんとなく気づくのが普通のようです。それをそれぞれの性格と環境の差異によつて、全く気になめずに流し去つてしまつたり、あるいはしばらくそれを眺め味わつたりすることになるのだと思います。今日の子どもたちの置かれている環境は前者を作るのに最も適したもののように思われます。つまり折角浮かんできた味わい深い問題から目をそらして浅はかな目の前の出来事に目も心も奪われすぎて行く、その結果はいつも不安とあせりに追われ我に帰つたとき底知れぬ虚しさに陥る、というこ

そで我々親や教師は、子どもたちに虚しくない人生を送らせるためにどうしてやつたらよいかということが問題になります。これは、どんな方法で尻をひっぱたいやつたら勉強するよつになるか、という問題より遙かに重大な教育問題です。

「人生について考えなさいよ」などと言つてみてもはじめません。私はやはり我々自身がこのことの重大性を理解し、子どもたちが感じているであろう問題について日常会話の中で触れていくのがよいのだと思います。こうした奥深い人生の問題は大人といえども徹底解決を得てゐるものではありません。もしかすると理解の程度は子どもとあまり違わないかもしま

せん。ですから我々が子どもに教えるということはできません。こうではないか、ああではないか、と話し合うことができるだけだと思います。そして、それでよいのだと私は思います。

それから、このようないの奥深くから生じてくる疑問は、数学の問題を解くように筋道を立てて解決に至るという性質のことではあります。せんから、これに執拗に取りついている必要はないということをよく心得ておくことは大切です。問題を捨てないように心のどこかにしまって、宿題として温めていればそのうち熟して解決の芽が出

てくるものだと「」ことをよく知つておかねばならぬ」と思つのです。

私は「」のようなどと考えて、

い「も塙の予たちに人生を教える手がかりになるような問題を出しています。今月の「天のはた」も

和田先生が描いた 上の畠からのスケッチ



ある日の一心寮

和田重正

後記

この号の編集で『まみず』百号の記念講演を久しぶりに読み直しました。ご存じの方もいらっしゃいますが、西堀栄三郎さんは、南極のオングル島に初めて日本の観測基地（昭和基地と命名）を建設したおひとりです。

（氷のため元々オングル島までは辿り着けなかつた）数日後、海の氷に遮られ動けなくなつてしましました。それを助けに来てくれたのがソ連の砕氷船オビ号でした。その時の経緯や、のちの昭和基地の越冬の様子をラジオやテレビで聞いていたのを思い出します。

（岩波新書に『南極越冬記』）

観測船「宗谷」が氷の海を脱出で
きるギリギリまでの二週間で建て上げた数個の粗末な建物が、日本初の南極越冬観測の基地となり、約十名の隊員が残って越冬することになりました。西堀さんはその十余名の命を預かる越冬隊長になりました。

越冬観測からのちに、上高地で若者たちと話ををする西堀さんを観る機会があり、わたしは西堀さんの人柄や生き様に益々興味を持つようになりました。積極的な生き方は観測や登山に限らず様々各个方面で観られました。

余談ながらそそくさとオングル島近くを離れた「宗谷」でしたが、

平澤 正義

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第88号

令和8年1月1日 発行

発行者 〒399-3701 長野県上伊那郡飯島町田切1295
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は年二千円 『ここに帰る』バックナンバーお分けします(有料)
◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇